

陳子昂の比興

——「修竹篇」と東方虬の賦——

加藤敏

一

初唐期の文学が齊梁の余波であり、華麗な修辭が好まれ、言志の文学の伝統が絶えていたことは、例えばすでに陳子昂の「修竹篇序」が明確に述べている認識である。「修竹篇序」は、

東方公足下、文章道弊五百年矣。漢魏風骨、晉宋莫傳。：僕嘗暇時觀齊梁間詩、彩麗競繁、而興寄都絕、每以永嘆。：風雅不作、以耿耿也。

と、風雅の文学が絶えていることを明確に指摘する。現在我々が目にするような初唐の詩の多くが、詩人に内在する人生や社会に対する省察という苦渋に満ちた精神の営みの結果、それを詩という形式に定着させることによって、焦燥や煩悶、諦観あるいは孤独感といった精神を蝕む感情を幾分なりとも解消しようとするような性格を持ったものでなかったことは確かである。しかし一方、例えば趙昌平氏は「開元十五年前後——論盛唐詩的形勢與分期」^(注1)の中で、異なった視点を呈示している。氏は、初唐の別集は王績と駱賓王以外はその当時残っていた宮廷詩の総集によって後人の集めた

もので、宮廷詩の総集であるからには、そこには一定の文学観が反映されており、当時の文学的状况が正確に反映されてはいないとする。また、「河嶽英靈集」の序に「夫文有神來、氣來、情來。有雅體、野體、鄙體、俗體。(夫れ文に神來、氣來、情來有り。雅體、野體、鄙體、俗體有り。)」とあるのを引用して、初唐期には宮廷を中心とした雅体の文学の他に、また別のスタイルが存在していたことを指摘する。その上で太宗期の作品の中から具体的に何首かの作品を挙げてい^(注2)る。

そのうち、例えば劉孝孫の「詠笛」、

涼秋夜笛鳴 涼秋 夜笛鳴り

流風韻九成 風に流れて韻九成す

調高時慷慨 調高くして時に慷慨し

曲變或淒清 曲変じて或は淒清たり

征客懷離緒 征客 離緒を懐ひ

鄰人思舊情 鄰人 旧情を思ふ

幸以知音顧 幸より知音の顧みるを以て

千載有奇聲 千載 奇声有り

は、三、四句及び五、六句に対句を配し、韻律を整

えた作品である。前半の四句では、涼秋の夜に流れる、時に慷慨を含み、時には凄清とした笛の音を詠じ、後半はその笛の音を聞きながら物思いに沈む征客や隣人の姿を点出する。末二句は再び笛の音に帰着し、知音の存在を冀いつつ歌いおさめている。この作品では作者の孤独感が全体の基調となっている。また李百薬の「空晚登古城」もこうした傾向を持った作品である。

日落征途遠 日落 征途遠く

悵然臨古城 悵然として古城に臨む

頽墉寒雀集 頽墉には寒雀集まり

荒堞晚鳥驚 荒堞には晚鳥驚く

蕭森灌木上 蕭森たり 灌木の上

迢遞孤煙生 迢遞として孤煙生ず

霞景煥餘照 霞景 余照に煥き

露氣澄晚清 露氣 晚清に澄む

秋風轉搖落 秋風 転た搖落す

此志安可平 此の志 安くんぞ平らかなるべけんや

長途の旅に出ている者の心境を詠じた作品である。

首句の「日落」「征途遠」という二語によってこの詩の全体の情調が示される。旅愁に沈む者の心を落日が

一層悲観的にしているのである。しかも彼の目にしてゐるのは荒廢し尽くしているのであるう古い城市の姿である。以下の六句にはその荒涼とした城市の景が描かれている。荒れ果てた城壁の辺りには雀や鳥が鳴き、人影もなく、灌木が生える辺りには一筋の煙が立ちのぼっている。古城を取り巻いている秋の夕暮れは美しく輝き、また澄みきっているが、秋風が吹くとともに全てのものが揺落してゆく。この情景を前にした旅人の心は安らぐことなく、更に深い悲哀に沈んでゆくのである。

この李百薬の作品は陳子昂の「晚次樂郷縣」の表現を彷彿とさせる。

故郷杳無際 故郷 杳として際無く

日暮且孤征 日暮 且つ孤征す

川原迷舊國 川原 旧國に迷ひ

道路入邊城 道路 辺城に入る

野戍荒烟斷 野戍 荒烟断え

深山古木平 深山 古木平らかなり

如何此時恨 如何せん 此の時の恨み

嗷嗷夜猿鳴 嗷嗷として夜猿鳴く

この作品は、彼が始めて都に向かった時のものとされて^(注3)いる。故郷を遠く去り、夕暮れに楽郷県に向けて旅をしている作者の目に映じた景が描かれているのであるが、荒涼とした情景は先の李百薬の作と相通じるものがある。ただ、李百薬の作品には「霞景煥餘照、露氣澄晚晴」という明澄な自然を描く句が見られるところは異なっている。ともあれ、陳子昂の心も安らぐことがない。嗷嗷たる夜猿の叫びが彼の悲痛な心を見事に表象している。

趙昌平氏が挙げた作品を見ると、確かに魏徴の有名な「述懐」や王績の諸作が初唐において孤立したものでなかったとすることが頷ける。この陳子昂の作品もこうした流れの中に位置づけることができよう。

また若き陳子昂の「晦日宴高氏林亭」「三月三日宴王明府山亭」などの諸作が、宮廷風の韻律を整えた詩であることは、高木正一氏が指摘しておられることである^(注4)。

しかし陳子昂の文学を特徴づけている「修竹篇」や「感遇」三十八首などはこれら両者とは相当に異なった表現の位相を持っている。「詩風の革新」^(注5)などとい

う言葉で評される所以である。しかしながら文学の営みが常に濃密な文学的伝統の中でなされるものである以上、これらの作品も同時代の文学のなかに位置付けられなければならないと思われる。

本稿では、東方虬の文学と比較しつつ陳子昂の「修竹篇」の検討を行い、彼の詩と賦との問題を考察することによって、その風雅比興の文学について再検討を加えてみたい。

二

陳子昂の「修竹篇」は、その序に「一昨於解三處見明公詠孤桐篇、骨氣端翔、音情頓挫、光英朗練、有金石聲。遂用洗心飾視、發揮幽鬱。不圖正始之音、復觀於茲。……故感嘆雅製、作修竹詩一篇。(一昨 解三の処に於て明公の孤桐を詠するの篇を見るに、骨氣は端翔にして、音情頓挫し、光英朗練として、金石の声有り。遂に用て心を洗ひ視を飾ひ、幽鬱を發揮す。因らざりき 正始の音、復た茲に觀んとは。……故に雅製に感嘆し、修竹の詩一篇を作る。)」とあるように、

東方虬の作品にあやかつて書かれたものである。

龍種生南嶽 龍種 南嶽に生じ

孤翠鬱亭亭 孤翠 鬱として亭亭たり

峯嶺上崇峯 峯嶺 上に崇峯として

烟雨下微冥 烟雨 下に微冥たり

夜聞鼯鼠叫 夜には鼯鼠の叫ぶを聞き

晝聒泉壑聲 晝には泉壑の声聒し

春風正淡蕩 春風 正に淡蕩として

白露已清冷 白露 已に清冷たり

哀響激金奏 哀響は金奏よりも激しく

密色滋玉英 密色は玉英よりも滋し

歲寒霜雪苦 歲寒くして霜雪苦しきも

含彩獨青青 彩りを含みて独り青青たり

豈不厭凝冽 豈に凝冽を厭はざらんや

羞比春木榮 春木の榮ゆるに比するを羞づればなり

春木有榮歇 春木には榮歇有るも

此節無凋零 此の節には凋零無し

始願與金石 始め金石と

終古保堅貞 終古 堅貞を保たんことを願ふ
不意伶倫子 意はず 伶倫子

吹之學鳳鳴 之を吹きて鳳鳴を学ばんとは

遂偶雲辭瑟 遂に雲辭の瑟に偶せられ

張樂奏天庭 樂を張りて天庭に奏す

妙曲方千變 妙曲 方に千変

簫韶亦九成 簫韶 亦た九成す

信蒙雕斲美 信に雕斲の美を蒙るも

常願事仙靈 常に仙靈に事へんことを願ふ

驅馳翠虬駕 翠虬の駕を驅馳し

伊鬱紫鸞笙 伊鬱たり 紫鸞の笙

結交羸臺女 交りを羸臺の女に結び

吟弄升天行 吟弄して天に升りて行かん

攜手登白日 手を携へて白日に登り

遠遊戲赤城 遠遊して赤城に戯れん

低昂玄鶴舞 低昂 玄鶴舞ひ

斷續綵雲生 斷続 綵雲生ず

永隨衆仙去 永く衆仙に随ひて去り

三山遊玉京 三山 玉京に遊ばん

この作品は、才能ある者がその才能故に自らを損なつてしまふという構造を持っており、それはまた陳子昂

の文学の基調ともなっているものである。例えば、

「感遇」其二十三、

翡翠巢南海 翡翠 南海に巢くひ
雄雌珠樹林 雄雌 珠樹の林にあり
何知美人意 何ぞ知らん 美人の意
嬌愛比黃金 嬌愛 黃金に比するを
殺身炎州裏 身を炎州の裏に殺し
委羽玉堂陰 羽を玉堂の陰に委ぬ
旖旎光首飾 旖旎として首飾光り
葳蕤爛錦衾 葳蕤として錦衾爛たり
豈不在遐遠 豈に遐遠に在らざらんや
虞羅忽見尋 羅を虞れ 忽ちに尋ねらる
多材固爲累 多材は固より累と爲る
嗟息此珍禽 嗟息す 此の珍禽を
は、みずからの価値故に損なわれてしまう翡翠とい
う存在をいとおしみ嘆いた作品である。また後に述べ
る「塵尾賦」も同様である。

陳子昂は武后の登場とともに麟台正字として仕えは
じめ、武后朝で活躍する。しかし彼の心中には次第に
複雑な思いが生じ、帰隱の気持ちを抱くようになって
ゆく。そうした彼の姿はそのまま修竹の姿に重ねられ

ている。故郷蜀の梓州射洪県で過ごしていたころの陳
子昂の姿を、盧藏用の「陳氏別傳」では、「嗣子子昂、
奇傑過人、姿狀嶽立。始以豪家子、馳使使氣、至年十
七八、未知書。嘗從博徒入鄉學、慨然立志、因謝絕門
客、專精墳典。數年之間、經史百家、罔不該覽。尤善
屬文、雅有相如子雲之風骨。（嗣子子昂、奇傑人に過
ぎ、姿狀嶽立す。始め豪家の子を以て、使を馳せ氣を
使ひ、年十七八に至るまで、未だ書を知らず。嘗て博
徒に従ひて郷學に入り、慨然として志を立て、因りて
門客を謝絶し、専ら墳典を精らかにす。數年の間、經
史百家、該覽せざる罔し。尤も善く文を属り、雅より
相如子雲の風骨有り。）」と描いている。文才に溢れ、
自負心の強い若き陳子昂の姿は、南岳でむささびの叫
び声を聞き、流れの音を聞いている孤高の修竹のイメー
ジと見事に一致している。また、修竹が伶倫に見いだ
され、天庭において重んじられていることは、陳子昂
が則天武后の朝廷に入り、活躍していたことをたとえて
いよう。さらにその修竹の心に生じた仙界への憧憬
は、官吏としての営みの中で次第に屈折し、帰隱の思
いを抱くようになってゆく陳子昂の姿と重なるもので

ある。

例えば、「感遇」三十八首の其五には、

市人矜巧智 市人 巧智に矜り

於道若童蒙 道においては童蒙の若し

傾奪相誇侈 傾奪して相誇侈し

不知身所終 身の終る所を知らず

曷見玄真子 曷ぞ見ん 玄真子の

觀世玉壺中 世を玉壺の中に觀るを

杳然遺天地 杳然として天地を遺れ

乘化入無窮 化に乗じて無窮に入る

のように世俗とその世俗を超越した存在である玄真子の姿とが対比されて描かれており、ここには世俗に對する冷やかな眼差しと仙人玄真子への憧憬という陳子昂の志向がよく伺われる。

「修竹篇」は興寄（比興）という手法を用いながら社会の中での存在である自らの姿と意識とを吐露した作品である。先の「晩次樂郷県」などとは異なった表現の位相を持っていることは明らかである。

ところでこの詩は東方虬の「詠孤桐篇」にあやかっただものである。そこで次章では東方虬の文学について

見てみることにしたい。

三

東方虬は、武后朝の左史（起居郎）であったこと以外詳しい事跡が明らかではない。左史は、従六品で、天子の起居注を司る官であり、彼は武后の宴に侍して応制の詩を作っていた。「舊唐書」文苑伝、宋之問の項には、「則天幸洛陽龍門、令從官賦詩。左史東方虬詩先成、則天以錦袍賜之。及之問詩成、則天稱其詞愈高、奪虬錦袍以賞之。（則天洛陽の竜門に幸し、從官をして詩を賦せしむ。左史東方虬詩先づ成り、則天錦袍を以て之に賜ふ。之問の詩成るに及びて、則天其の詞を稱すること愈いよ高く、虬が錦袍を奪ひて以て之を賞す。）」という逸話を載せている。

その作品は、詩としては「全唐詩」に「昭君怨」三首、「春雪」一首、「全唐詩外篇」に「昭君怨」一首の計五首を伝えるのみであるが、他に「尺蠖賦」「蚯蚓賦」「蟾蜍賦」という三篇の賦が残っている。

「昭君怨」は四首からなる連作詩であったと思われるが、その第一首、

漢道初全盛 漢道初めて全盛にして

朝廷足武臣 朝廷に武臣足るに

何須薄命妾 何ぞ須るん 薄命の妾の

辛苦遠和親 辛苦して遠く和親するを

では、王昭君を降嫁させなければならぬ漢の朝廷の状況に対する批判を述べる。歴代の王昭君に関する樂府「昭君怨」「王昭君」においては、このように朝廷のありかたを批判した例は見られない。また第二首、

揜淚辭丹鳳 涙を揜ひて丹鳳を辭し

銜悲向白龍 悲しみを銜みて白竜に向かふ

單于浪驚喜 單于是浪りに驚喜し

無復舊時容 復た旧時の容無し

では、悲しみのうちに白竜堆のかなたに向かう王昭君の姿が描かれ、降嫁がもたらした和睦が暗示される。続く第三、四首では、降嫁した後の王昭君について歌う。総じてその表現はそれまでの樂府の表現を継承するものであり、第一首の朝廷への批判を除いては、全体として新たな視点は見られない。

また「春雪」は、

春雪滿空來 春雪 空に満ちて来り

觸處似花開 觸るる処 花の開くに似る

不知園裏樹 知らず 園裏の樹

若箇是真梅 若箇れか是れ真梅なるを

と、早春の庭に咲いた梅花と春雪とを関連させた作品で、宮廷詩人らしい感性は伺われるが、こうした表現は他にも見られるものであり、ことに優れているというわけではない。

一方、彼の賦は初唐期においては独自の地位を占めるものである。「尺蠖」「蚯蚓」「蟾蜍」という美的ではない小存在を対象とした詠物の賦は、初唐期においては制作されていない。初唐期では例えば「白鹿賦」「馴鴛賦」「鵲賦」などのような生物を対象として称賛した詠物の賦の例があるが、東方虬の作のような微小な存在を題材としたものは見られない。しかし漢魏六朝時代には「蚕賦」「蝙蝠賦」「蟋蟀賦」「尺蠖賦」他があり、東方虬の三つの賦もこうした先行作品の影響のもとに書かれたものである。そして彼の賦には詩には見られない特色があるように思われる。

この三つの賦のうち、例えば「尺蠖賦」は次の様な作品である。

六氣氤氳 六氣氤氳として

四時平分 四時平分す

天道恍忽として 天道恍忽として

是に万物を生ず 是に万物を生ず

化して鳥と為れば 化して鳥と為れば

鳴鳳の來儀有り 鳴鳳の來儀有り

化して虫と為れば 化して虫と為れば

尺蠖の能く屈する有り 尺蠖の能く屈する有り

原夫蠖之爲生也 夫の蠖の生爲るを原ぬれば

飲まず食はず 飲まず食はず

榮とするに非ず 利とするに非ず

道を進まんと欲する無く 道を進まんと欲する無く

処身 智あるに似たり 処身 智あるに似たり

幸ひに天地の生を稟け 幸ひに天地の生を稟け

亦た雲雨の施を承く 亦た雲雨の施を承く

晒搏撃して疾きことを争ふを晒ひ 晒搏撃して疾きことを争ふを晒ひ

爪牙して自ら致すを軽んず 爪牙して自ら致すを軽んず

其の勇なるや 其の勇なるや

不怯雷霆之聲 雷霆の声を怯れず

其慎也 其の慎なるや

寧勞鷹隼之驚 寧ぞ鷹隼の驚を勞せんや

浩然無悶之境 無悶の境に浩然たりて

獨處不爭之地 獨り不爭の地に処り

多其順時而出 其の時に順ひて出で

就暖而長 暖に就きて長し

吐微絲而逍遙 微絲を吐きて逍遙し

蹙緩歩而來往 蹙として緩歩して來往す

當靜泉澄 靜泉の澄めるに當り

遇躁風興 躁風の興るに遇ふ

屈伸進退 屈伸して進退すること

翼翼繩繩 翼翼して繩繩たり

同吹萬而生養 吹万にして生養するに同じくして

體抱一以含宏 一を抱きて以て含宏なるを体す

聖人書之以作誠 聖人は之を書して以て誠と作し

君子行之而足徵 君子は之を行ひて徵とするに足る

況不才之下士 況んや不才の下士

敢求伸以自矜 敢へて伸ぶるを求めて以て自ら矜

其の勇なるや 其の勇なるや

尺蠖は、『易經』繫辭伝に「尺蠖之屈、以求信也。尺蠖の屈するは、以て信びんことを求むるなり」と

述べられている尺取り虫のことで、その屈伸に自然界における変化の様態や人事における窮通が表象されているとされる。以後、例えば曹植の「長歌行」に「尺蠖知屈伸、體道識窮達。(尺蠖屈伸を知り、道を体して窮達を識る)」と表現されるように、作品の中では窮達を表象する存在として描かれている。

東方虬の「尺蠖賦」もこうした尺蠖の表象を受け継いだものであるが、この作品には鬱屈した不遇な精神の表出が見られる。東方虬は尺蠖という取るに足らぬ存在を天地間に生じた万物のなかでも鳳凰に比すべきすぐれたものとして称揚している。それは、飲むことも食らうこともなく、荣誉や利益をはかろうとすることもなく、身の処しかたには智があるようである。また互いに攻撃しながら早さを争うことを笑い、爪と牙で自らを守れることを軽んじる。雷の音を畏れず、猛禽にわずらわされることもない。ゆつたりと憂いなき独居

の境におり、常に慎み敬いつつ過ごしている。東方虬は、聖人や君子でさえこの尺蠖を戒めとするのであるから、不才の下士はなおさらこの尺蠖を戒めとして、

榮達を求め、それをほこつてはならない、と述べてこの賦を結んでいる。

ところで、この作品は直接には次に挙げる鮑照の「尺蠖賦」を踏まえたものである。

智哉尺蠖 智なるかな 尺蠖

觀機而作 機を觀て作す

伸非向厚 伸ぶるも厚きに向かふに非ず

屈非向薄 屈するも薄きに向かふに非ず

當靜泉渟 静泉の渟まるに当たり

遇躁風驚 躁風の驚くに遇ふ

起軒軀以曠跨 起ちて軀を軒げて以て曠跨し

伏累氣而併形 伏して氣を累ねて形を併す

冰炭弗觸 冰炭も触れず

鋒刃靡辻 鋒刃も辻ふ靡し

逢險蹙躄 險に逢ひて蹙躄し

值夷舒歩 夷に値ひて舒歩す

忌好退之見猜 好みて退くの猜はるるを忌み

哀必進而爲蠹 必ず進みて蠹と為るを哀しむ

每驥首以瞰途 毎に首を驥げて以て途を瞰

常駐景而翻露 常に景に駐まりて露に翻る

故身不豫託

故に身豫託せず

地無前期

地に前に期する無し

動靜必觀於物

動靜するに必ず物を觀

消息各隨乎時

消息するに各時に隨ふ

從方而應

方に從ひて応じ

何慮何思

何をか慮り何をか思はん

是以軍算慕其權

是を以て軍算は其の權を慕ひ

國容擬其變

國容は其の變に擬す

高賢圖之以隱淪

高賢は之を圖りて以て隱淪し

智士以之而藏見

智士は之を以てして見を藏す

.....

.....

鮑照の作品と東方虬の作品を比較すると、兩者の尺蠖の描写は極めて類似していることが分かる。しかし

東方虬の作品においては尺蠖が鳳凰と等しい存在として位置づけられ、稱賛されているのである。また、鮑

照の作では「高賢」と「智士」が挙げられているのに對し、東方虬の作では「聖人」と「君子」に加え、

「不才之下士」が挙げられている点にも特徴がある。

さらに「其勇也、不怯雷霆之聲（其の勇なるや、雷霆の声を怯れず）」と、尺蠖の勇氣を指摘するのも鮑照

の作には見られない部分である。

この東方虬の「尺蠖賦」は、作者が望ましいとする生きかたを尺蠖に託して表出したものである。悠然と無悶の境に居ておのが榮達を望むこともなく、常に慎み深く生き、そして一方では天子の威光を畏れることのない勇氣を持ち、猛禽に例えられる権力者に患わされることのない慎重さをそなえている。そしてこの微小なる存在は、とりもなおさず武后期における一介の左史であつた東方虬の存在そのものの表象ではなからうか。しかし「不才之下士」ということはが端的に示しているように、こうした生きかたはおそらく現実との軋轢のなかでネガティブなものとして求められていたものであろう。

尺蠖という微小な存在に託して自らの生き方を述べたという点で、この賦は詠物の賦でありながら、まさしく比興の作品となつていたのである。

さらに「蚯蚓賦」を見てみよう。

惟陰陽之播氣 惟れ陰陽の氣を播き

實萬類以呈形 實に万類以て形を呈す

有微蟲之稟質 微虫の質を稟くる有り

應甲子而濕生

甲子に應じて濕生す

雨欲垂而乃見

雨垂れんと欲して乃ち見れ

暑既至而先鳴

暑既に至りて先づ鳴く

乍逶迤而鱗屈

乍ち逶迤として鱗屈し

或宛轉而蛇行

或は宛轉として蛇行す

内乏筋骨

内に筋骨乏しく

外無手足

外に手足無し

任性行止

性に任せて行止し

物擊便曲

物撃ちて便ち曲る

徒進退而皓首

徒らに進退して皓首をあげ

竟不知其所欲

竟に其の欲する所を知らず

東西詰屈

東西に詰屈し

南北夤緣

南北に夤緣す

上食塵塊

上は塵塊を食ひ

下飲淵泉

下は淵泉に飲む

應軒轅土德之王

軒轅土德の王なるに応じ

入蔡邕勸學之篇

蔡邕勸學の篇に入る

其體甚微

其の体は甚だ微なるに

其用至專

其の用は至りて専らなり

瑾泥塗以自保

泥塗に瑾りて以て自ら保ち

觸鹽滋而罔全

塩滋に触れて全き罔し

豈造化之賦命

豈に造化の命を賦し

信歸之於自然

信に之を自然に帰するならんか

蚯蚓すなわちみみずは、『呂氏春秋』應同に「黃

帝時、天先見大蟻大螻。(黃帝の時、天先づ大蟻大螻

を見す)」と述べられ、また『大戴禮』勸學に「夫

蟻無爪牙之利、筋脈之強、上食晞土、下飲黃泉者、用

心一也。(夫れ蟻に爪牙の利き、筋脈の強き無きに、

上は晞土を食ひ、下は黃泉に飲むは、心を用ふるこ

一なればなり。)」と言及される虫で、土德に應じ、專

一さを備えているとされている。

この「蚯蚓賦」においても、性のままに動き、塩氣

に触れて消滅してゆく「微虫」の專一さが称賛されて

いる。この「微虫」の姿は、尺蠖と同じく、微小な存

在である自己の表象なのである。

東方虬の「尺蠖賦」「蚯蚓賦」と陳子昂の「修竹篇」

との表現の差異は明らかである。すなわち、陳子昂の

修竹は人間にとつての価値という自己を損う要素を内

包した存在であるのに対し、東方虬の尺蠖や蚯蚓には

こうした矛盾する構造は見られない。彼の賦において

はこれらの存在が称賛の対象となつてゐるのみである。

しかし、蚯蚓や尺蠖といった微虫に注目するという営みは、社会における自らの存在への凝視を前提とせず
に考えることはできない。武后朝の左史である自分が
まさに微虫に等しいものであることに思い至つた時、
この二つの賦は成立したのである。微虫を称賛するこ
とは、とりもなおさず自らの存在を肯定することに他
ならない。このように東方虬の尺蠖や蚯蚓は自らの存
在と緊密に関わつてゐるのである。前述のように、陳
子昂における修竹もやはり同様である。対象の描き方、
詩と賦というジャンルの差異はあつても、想定された
対象と自己との関係においてはこの両者は軌を一にす
るといつてよいであろう。

散佚した「詠孤桐篇」がどのような作品であつたか
は明らかではないが、現存している東方虬の作品から
すると、比興の表現をとつた、詩よりはむしろ賦に近
い内容を持ったものであつたことが考えられる。おそ
らく「孤桐」に託して、「不才之下土」であり「微虫」
である自己の感懐を吐露した作品であつたのだろう。

四

陳子昂の賦の作品としては「麀尾賦」一篇が伝わる
のみである。

天之浩浩兮物亦云云

天之浩浩たり 物も亦た云云たり

性命變化兮如絲之棼

性命の變化すること絲の棼たるがご

とし

或以神好正直

或は以て神好く正直なるに

天蓋默默

天は蓋し默默たり

或以道惡彊梁

或は以て道悪しく彊梁なるに

天亦茫茫

天亦た茫茫たり

此先都之靈獸

此れ先都の靈獸なるに

固何負而罹殃

固より何にか負きて殃に罹れる

始居幽山之藪

始め幽山の藪に居り

食乎豐草之鄉

豐草の郷に食ふ

不害物而利己

物を害ひて己を利せず

每營道而同方

毎に道を営みて方を同じくす

何忘情而委代

何ぞ情を忘れて代に委ぬる

何代情之不忘 何の代情か之れ忘れざらんや

卒梁網以見逼 卒に梁網以て逼らる

愛庖割而罹傷 庖割を愛めども傷に罹る

豈不以斯尾之有用

豈に斯の尾の有用なるを以てして

而殺身於此堂 身を此の堂に殺すならざらんや

爲君雕俎之差 君が雕俎の差と爲り

廁君金盤之實 君が金盤の實に廁る

承正人之嘉慶 正人の嘉慶を承け

對象筵與寶瑟 象筵と宝瑟とに對す

雖信美於茲辰 信に茲の辰に美しと雖も

詎同歡於疇日 詎ぞ歡を疇日に同じくせんや

客有感而嘆者 客に感じて嘆ずる者有り

曰命不可思 曰く 命は思ふべからず

神亦難測 神も亦た測り難し

吉凶悔吝 吉凶と悔吝と

未始有極 未だ始めより極まり有らず

借如天道之用 借如天道の用ならば

莫神於龍 竜よりも神なるは莫きも

受戮爲醢 戮を受け醢と爲り

不如其凶 其の凶を知らず

王者之瑞 王者の瑞は

莫聖於麟 麟よりも聖なるは莫きも

遇害於野 害に野に遇ひ

不知其仁 其の仁を知らず

神既不能自智 神なるも既に自ら知る能はず

聖亦不能自知 聖なるも亦た自ら知る能はず

況林棲而谷走 況んや林棲して谷走し

及山鹿與野麋 山鹿と野麋に及ぶにおいてをや

古人有言 古人に言有り

天地之心 天地の心

其間無巧 其の間巧無し

冥之則順 冥の順に則り

動之則天 動の天に則る

諒物情之不異我心

物情の我が心に異ならざるを諒すれ

ば

又何兢於猜矯 又た何ぞ猜矯に兢せんや

故曰 故に曰く

天之神明 天の神明なること

與物推移 物と推移す

不爲事先 事先と為さず

動而輒隨 動きて輒ち隨ふ

是以至人無己 是を以て至人は己無く

聖人不知 聖人は知らず

予欲全身而遠害

予身を全くして害より遠ざからんと

欲すれば

曾是浩然而順斯

曾ち是れ浩然として斯に順はん

この賦には「甲申歳、天子在洛陽。余始解褐、守麟臺正字。太子司直宗秦客置酒金谷亭、大集賓客。酒酣、

共賦座上食物。命余爲麀尾賦焉。（甲申の歳、天子洛陽に在り。余始めて解褐し、麟台正字に守たり。太子

司直宗秦客金谷亭に置酒し、大いに賓客を集む。酒酣にして、共に座上の食物を賦す。余に命じて麀尾の賦

を為らしむ。」という序が付されている。それによる

と、これは陳子昂が文明元年（六八四）に麟台正字を

拝していた折、宗秦客の宴席で作られた詠物の賦であ

る。その尾が扠子になるというおもしろさが、人間にとつ

て価値を有するために自らの生を損つてしまうことを

述べたものである。陳子昂はこの靈獸の運命に思いを

致し、天道は測り知れぬものであり、自らはできるか

ぎり害より遠ざかりたいものであるという思いを激し

い調子で吐露して^(注6)いる。

先の「修竹篇」の修竹も、その価値故に簾に作りか

えられ珍重されるのであるが、それは修竹本来の生と

相乖くものであるという構造を持つており、それは

「麀尾賦」に等しい。「修竹篇」とこの「麀尾賦」とは、

詩と賦という様式上の差はあるものの、天道について

言及する説理の部分を除けば、対象の表現、比興の方

法においては同一のものである。

おわりに

「感遇詩」三十八首を中心とした陳子昂の文学の源

は、いうまでもなく阮籍である。本稿で考察してきた

比興の手法についても、阮籍の詠懐詩の中には、其四

十三、其四十六、其四十八、其七十九、其八十二など

の例が見られる。例えば其七十九では、

林中有奇鳥 林中に奇鳥有り

自言是鳳凰 自ら言ふ 是れ鳳凰なりと

清朝飲醴泉 清朝 醴泉に飲み

日夕栖山岡 日夕 山岡に栖む

高鳴徹九州 高鳴 九州に徹り

延頸望八荒 頸を延ばし八荒を望む

適逢商風起 適たま商風の起るに逢へば

羽翼自摧藏 羽翼自ら摧藏す

一去崑崙西 一たび崑崙の西に去れば

何時復廻翔 何れの時にか復た廻翔せん

但恨處非位 但だ恨む 処ることの位に非ざるを

愴恨使心傷 愴恨して心をして傷ましむ

と、鳳凰に託して自らの感懐を吐露している。また

「修竹篇」に見られるような竹を素材とした作品は、

同時代で言えば王績の「古意」其二に見ることができ

る。

竹生大夏溪 竹 大夏の溪に生じ

蒼蒼富奇質 蒼蒼として奇質に富む

緑葉吟風勁 緑葉 風に吟じて勁く

翠莖犯雪密 翠莖 雪を犯して密なり

霜霰封其柯 霜霰 其の柯を封じ

鴛鸞食其實 鴛鸞 其の実を食ふ

寧知軒轅後 寧ぞ知らん 軒轅の後

更有伶倫出 更に伶倫の出づる有りとは

刀斧俄見尋 刀斧 俄に尋ねられ

根株坐相失 根株 坐ろに相失ふ

裁爲十二管 裁ちて十二管と爲し

吹作雄雌律 吹きて雄雌の律を作す

有用雖自傷 有用は自ら傷ると雖も

無心復招疾 無心も復た疾を招く

不如山上草 如かず 山上の草の

離離保終吉 離離として終吉を保つには

これら作品が陳子昂の文学に影響を与えているこ

とは否めない。しかし東方虬の賦と「修竹篇」、「塵尾

賦」に見られる比興の手法を考慮すると、両者は極め

て近い距離にあったことも明らかである。殊に「修竹

篇」は、東方虬の賦及びそれとほぼ軌を一にしていた

であろう「詠孤桐篇」の影響の下に成立した作品とし

て位置付けることができる。比興の文学は東方虬らに

おいては、賦を作るという営みのうちに、むしろ容易

に実現されていたのであろう。

注1 『中国文化』(第2期 一九九〇年春季号)

一〇五—一五ページ

注2 趙昌平氏の挙げているのは以下の作品である。

王珪「詠漢高祖」「詠淮陰侯」、陳叔達「聽鄰人琵琶」

「自君之出矣」、袁朗「秋夜獨坐」、長孫無忌

「灞橋待李將軍」、魏徵「述懷」「暮秋言懷」、劉孝

孫「詠笛」、陸敬「巫山高」、楊師道「還山宅」、

鄭世翼「過嚴君平古井」「巫山高」、孔紹安「結客

少年場行」、杜之松「和衛尉寺柳」、崔善爲「答王

無功」、朱仲晦「答王無功九日」、陳子良「於塞北

春日思歸」、馬周「凌朝浮江旅思」、來濟「出玉關」、

李百藥「晚秋登古城」「晚渡江津」「送別」

注3 例えば『陳子昂詩注』(彭慶生著 四川人民出版社

版社 一九八一)は、調露元年の作品としている。

注4 高木正一氏「陳子昂と詩の革新」(『吉川博士退

休記念中国文学論集」)

注5 高木正一氏 同論稿。

注6 馬積高氏は『賦史』(上海古籍出版社 一九八

七)において、「此賦基本上是説理、其旨意亦不過

安時處順的常言。∴然其行文之中、充滿着對禍福無常的憤慨、筆力遒勁、∴」と指摘している。